

# 『徒然草』第二十二段における兼好の尚古思想について

小山田 光 廣

## 一、はじめに

「何事も、古き世のみぞ慕はしき」で始まる『徒然草』第二十二段は、兼好の尚古思想が露わに見られる章段であろう。こうした「古き世」への憧憬は、第二十二段にとどまらず、『徒然草』の全編を通じて数多く見られる。例えば、第二段の「いにしへのひじりの御代の政をも忘れ…」、第十段の「うちある調度も昔覚えてやすらかなるこそ…」、第十四段の「古き歌どものやうに…」と、古代政治、昔の調度品、古い時代の和歌など多岐にわたっていることがうかがえる。そこで、ここでは、『徒然草』における兼好の尚古思想について、第二十二段を中心に、他の章段との関わりも含めて考察してみたい。

## 二、「器物」と「文の詞」と「たゞ言ふ言葉」

第二十二段は、冒頭から、「古き世」に対する憧憬が披瀝されて

いる。

何事も、古き世のみぞ慕はしき。今様は、無下にいやしくこそなりゆくめれ。<sup>①</sup>かの木の道の匠の造れる、うつくしき器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。

文の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき。<sup>②</sup>たゞ言ふ言葉も、<sup>③</sup>口をしようこそなりもてゆくなれ。古は、「車もたげよ」、「火か、げよ」とこそ言ひしを、今様の人は、「もてあげよ」、「かきあげよ」と言ふ。「主殿寮人数立て」と言ふべきを、「たちあかししろくせよ」と言ひ、最勝講の御聴聞所なるをば「御講の盧」とこそ言ふを「講盧」と言ふ。口をしとぞ、古き人は仰せられし。<sup>④</sup>

(第二十二段)<sup>①</sup>

まず、兼好は、「古き世」の「慕はし」さに対して、「今様」の「いやしく」なりゆく様子を対比させ、<sup>①</sup>「かの木の道の匠の造れる、うつくしき器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ」と述べる。「かの木の道の匠」と、「かの」を付すのは、理想の女性を論じた、『源

『氏物語』帚木卷の雨夜の品定めを受けていることが、加藤磐齋『徒然草抄』<sup>2)</sup>に指摘されている。そこで左馬頭は、

「よろづのことによそへて思せ。木の道の匠のよろづの物を心にまかせて作り出だすも、臨時のもてあそび物の、その物と跡も定まらぬは、そばつきさればみたるも、げにかうもしつべかりけりと、時につけつつさまを変へて、いまめかしきに目移りて、をかしきもあり。大事として、まことにうるはしき人の調度の、飾りとする定まれるやうある物を難なくし出づることなむ、なほまことの物の上手はさまことに見え分かれはべる。」

(『帚木卷』<sup>3)</sup>)

と発言している。左馬頭は、たとえ話として、「木の道の匠」が、その場かぎりの遊び道具として作った物は、目新しさに引かれて面白く見えることもあるが、伝統的な格式に基づく調度品は、その技も格別であり、はつきりと見分けられると述べる。すなわち、指物師の作品に関して、一見人目を引くだけの品物よりも、伝統的な格式による調度品の方が優ることを説いている。そこで、兼好の古き世への憧れを示すものの一つとして、第三節では、調度品を取り上げる。

次に、兼好は、②「文の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき」と述べる。まず、文という語の意味は、手紙、書物、学問、漢詩など幅広いものであり、『徒然草』全体を通じても様々な意味で使われている。したがって、第二十二段の意味を深く理解するために、第

四節では文を取り上げて考察したい。

続いて、③「たゞ言ふ言葉も、口をしうこそなりもてゆくなれ」とあり、兼好は、日常の言葉遣いも、いつの間にか、情けないものになっていると述べ、特に宮中にまつわるものを例に挙げ、その崩れように心を痛めていた。第五節では言葉遣いに対する兼好の意識を取り上げる。

以上のように、第二十二段においては、兼好の古い時代への憧れを示すものとして、『源氏物語』帚木卷を受けた調度品、文、言葉遣いが挙げられていた。次節以降、これらについてさらに深く考察していきたい。

### 三、調度品をめぐつて

①「かの木の道の匠の造れる、うつくしき器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ」を理解するために、関連する章段を検討したい。まず、第十段には、

家居のつきぐしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ。

よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も一きはしみぐくと見ゆるぞかし。今めかしく、さら、かならねど、木立もの古りて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覚えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くの工の、心を尽くしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心のま、ならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは長らへ住むべき。また、時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るより思はるゝ。大方は、家居にこそ、ことざまはおしはかるるれ。…… (第十段)

とあり、ここには、「うちある調度も昔覚えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ」とあつて、その一方、「多くの工の、心を尽くしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度」は、否定的に評価される。

さらに、調度品と並んで述べられている木立についても見てみたい。兼好は、木立が、「もの古り」ている状態や、「わざとならぬ」庭の草木にも、奥ゆかしさを感じる一方、「心のままならず作りなせる」前栽の草木を「見る目も苦しく、いとわびし」と、見苦しい物と感じていた。兼好にとつて、調度品と庭の草木は、家居を構成する重要な要素であり、古風であつさりしたものを好んでいたことが知られる。こうした考えは、第七十二段においても、「賤しげなる物」として、「居たるあたりに調度の多き」、「前栽に石・草木の多き」と、繰り返し述べられている。

第十段においてはさらに、「大方は、家居にこそ、ことざまはおしはかるるれ」と続いていて、後徳大寺大臣が寝殿に薦のとまらなようにしたことを例に挙げ、住居から人柄がうかがえることを述べている。

そこで、改めて『徒然草』全体を通じて、調度品、庭の草木、住む人の人柄の三者について見渡してみたい。まず、調度品については、第九十九段に逸話が見られる。檢非違使庁の長官の久我基俊は、庁の中に古くから伝わる唐櫃が見苦しいとして、新調するよう指示した。しかし、故実に通じた役人が、「累代の公物、古弊をもちて規模とす」と申し入れたため、沙汰止みになったという。ここには、伝統的な調度品が、古びてほころびながらも、長い年月を経て大切に使われていることに価値を見出す兼好の価値観がうかがえる。

また、第八十二段では、頓阿の「羅は上下はつれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそ、いみじけれ」や、弘融僧都の「物を必ず一具に調へんとするは、つたなき者のする事なり。不具なるこそよけれ」という言葉を紹介するとともに、内裏建造の際にも、未完成の部分を残す例を挙げながら、不整の美について述べている。

次に、庭の草木についてであるが、第十段に「木立もの古り」とあるので着目すると、他に三例ある。第二十四段では、神社の神々しく優雅な様子が、「もの古りたる森のけしきもたゞならぬに」と描かれ、第四十三段では、のどやかに住みなしている貴公子を目撃した様子を、「木立もの古りて、庭に散り萎れたる花見過ぐしがたきを」とし、第三十九段では、家にありたき庭木について、「橘・桂、いづれも、木はもの古り、大きなる、よし」と述べられている。また、第三百三十九段の最後では、「大方、何も珍しく、ありがたき物は、よからぬ人のもて興ずる物なり。さやうのもの、なくてありなん」とまで言い切っている。これは、第十段において、

「唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし」と述べた考えそのものである。

このような珍しいものに対する否定的な兼好の考えは、第二百二十段にも見られ、「唐の物は、葉の外は、みななくとも事欠くまじ」や、「遠き物を宝とせずとも、また、得難き貨を貴ます」にも見られる。さらに、第二百二十一段には、「凡そ、『珍しき禽、あやしき獸、国に育はず』とこそ、文にも侍るなれ」と、漢籍の言葉を引用して、舶来の珍しいものをもてはやすことに、苦言を呈している。

続いて、調度品が人柄を表す例としては、第八十一段に、屏風・障子などに書かれた絵や文字が、下手な筆遣いで書かれているのは、見にくいというよりも、「宿の主のつたなく覚ゆるなり」と述べられている。そしてこの段の「大方、持てる調度にても、心劣りせらるゝ事はありぬべし」は、第十段の「大方は、家居にこそ、ことざまはおしはからるれ」と一致していることがわかる。

ここで、兼好が、第二十二段で「かの木の道の匠」とした、『源氏物語』帯木巻に立ち返ってみたい。先ほどの続きを引用すると、

また絵所に上手多かれど、墨書き選ばれて、次々に、さらに劣りまさるけぢめふとしも見え分かれず。かかれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚のすがた、唐国のはげしき獸の形、目に見えぬ鬼の顔などのおどろおどろしく作りたる物は、心にまかせてひときは目おどろかして、実には似ざらめど、さてありぬべし。世の常の山のたたずまひ、水の流れ、目に近き

人の家居ありさま、げにと見え、なつかしくやはらいだる形などを静かに描きまぜて、すくよかならぬ山のけしき、木深く世離れて置みなし、け近き籬の内をば、その心しらひおきてなどをなむ、上手はいと勢ひことに、わる者は及ばぬところ多かめ

手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしこの、点長に走り書き、そこはかたなく気色ばめるは、うち見るにかどかどしく気色だちたれど、なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、いま一たびとり並べて見れば、なほ実になむよりける。はかなきことだにかくこそはべれ。まして人の心の、時にあたりて気色ばめらむ見る目の情けをば、え頼むまじく思うたまへえてはべる。そのはじめのこと、すきずきしくとも申しはべらむ」とて…… (帯木巻)

とあり、絵や筆跡の名人の技についても取り上げている。ここでは、唐国の景色や猛獸を仰々しく描いた絵よりも、見慣れた景色をそれらしく描く名人の筆勢の方が格別であることや、点を長く引いたりして気取った筆跡よりも、伝統的な筆法で書かれたものの方が優れていることを述べる。そして、人の心についても、その場かぎりの思わせぶりの見せかけだけの風情をあてにできないとしている。こうした一見人目を引く出来映えに関しては、第五十四段では、稚児を喜ばせようとする余り失敗した仁和寺の法師に対して、「あまりに興あらんとする事は、必ずあいなきものなり」とし、第一百八十七段では、あらゆる道の専門家が、非専門家に比べて慎重なこと

を述べ、「大方の振舞・心遣ひも、愚かにして慎めるは、得の本なり。巧みにしてほしきまゝなるは、失の本なり」と戒める。また、第二百三十一段では、鯉の料理を申し出た包丁の家の人の、百日の鯉を切る誓いを立てているという言動を批判し、「大方、振舞ひて興あるよりも、興なくてやすらかなるが、勝りたる事なり」と述べる。これらはすべて、調度品や庭の草木を批評するときにも見られたように、不自然でわざとらしい物事に対する否定的な考えである。

以上、調度品を例とした兼好の考え方について検討を試みた。第十段において、兼好は、古風で落ち着いた調度品や、自然なよそおいの庭の草木を家居の理想として挙げており、そこから人柄をも推し量ることができるとした。こうした考えは、人の振る舞いにも及び、人目を引こうとする行動への批判も見受けられる。そもそも、このような考えのきっかけは、『源氏物語』帚木巻にあった。雨夜の品定めは、伝統的で素直なものを良しとして、一見人目を引くような物に対する兼好の批判の目を養うものであったことがわかる。

#### 四、文をめぐって

②「文の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき」を読解するにあたって、文をめぐる問題を取り上げたい。『徒然草』全体を見渡すと、文の用例は、二十二例見られる。この内訳は、第二十二段の他、手紙を意味する五例、漢籍を示す八例、漠然と書物を示す八例である。ここでは、手紙を表すものと、漢籍を示すものの二つに着目し、内容を詳細に検討する。

まず、文が手紙を意味する用例の五つである。一つめ、第十五段では、「都へ便り求めて文やる、『その事、かの事、便宜に忘るな』など言ひやるこそをかしけれ」とあり、旅先から都へ送る手紙の面白さが述べられる。兼好は、旅がもたらす高揚感や、山里の新鮮さを述べている。また、旅先において、良い調度品や上品な人が、普段よりも立派に見えることを述べており、これらを好む兼好の考えが見て取れる。

二つめ、第二十九段には、

静かに思へば、万に、過ぎにしかたの恋しさのみぞせんかたなき。

人静まりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりした、め、残し置かじと思ふ反古など破り棄つる中に、亡き人の手習ひ、絵かきすさびたる、見出でたるこそ、たゞ、その折の心地すれ。このごろある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心もなくて、変らず、久しき、いとかなし。

(第二十九段)

とあり、静寂な夜に過去を懐かしみ、物思いにふける兼好の姿が、鮮明に表れている。兼好は、故人の手習いや絵といった反古だけでなく、今なお生きている人の手紙を見ても往時の気持ちがい起こされるとしている。

三つめ、第三十一段には、

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべき事ありて、文をやるとて、雪のこと何とも言はざりし返事に、「この雪いかゝ見ると一筆のたまはせぬほどの、ひがくしからん人の仰せらるゝ事、聞き入るべきかは。返すく口をしき御心なり」と言ひたりしこそ、をかしかりしか。

今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れがたし。

(第三十一段)

とあり、ここでも、今は亡き女性との手紙のやりとりが回想されている。兼好は、雪の朝、手紙の中でその雪について触れなかったため、その無風流を相手にたしなめられたことを忘れがたいと述べる。「今は亡き人」については、近代の諸注に従って女性と考えたい。

四つめ、第三十五段には、「手のわるき人の、はばかりせず、文書き散らすは、よし。見ぐるしとて、人に書かするは、うるさし」とあり、筆跡の下手な人の手紙に対する態度について、良い例と悪い例を対比させ、筆跡が下手で人に書かせるよりも、それを気にせず遠慮無く手紙を書くことを良しとする。

五つめ、第七十段では、「文も、『久しく聞こえさせねば』などばかり言ひおこせたる、いとうれし」とあり、しばらくの間やりとりのなかった相手からの心遣いの手紙を喜ぶ兼好の様子が知られる。以上、文が手紙を示す五例について見てきた。第二十二段の「文の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき」と照らし合わせると、手紙を見ながら昔を偲ぶ兼好自身を描いた第二十九段や、今は亡き女性

との手紙のやりとりの思い出を綴った第三十一段が、まさに適合するし、その他の、第十五段、第三十五段、第七十段は、手紙の効用が述べられている。第二十二段の文は、手紙とされているが、他の段と照らし合わせると手紙でよいことがわかる。

次に、文が漢籍を示す八例を検討したい。一つめの第一段には、

ありたき事は、まことしき文の道、作文・和歌・管弦の道。

また、有職に公事の方人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手など拙からず走り書き、声をかしくて拍子とり、いたまじうするものから、下戸ならぬこそ、男はよけれ。(第一段)

とあり、兼好は、男性として備えておきたい素養として、「まことしき文の道」を最初に挙げる。ここで文は、経書の学問を示す。これは、生まれつきの容姿・容貌よりも、学識の大切さを述べた前の段落を受けたものである。

二つめ、第二百二十二段にも、「人の才能は、文明らかにして、聖の教を知れるを第一とす。次には、手書く事、むねとする事はなくとも、これを習ふべし。学問に便りあらんためなり」とある。ここでも、文は、漢学の意味で使われているとともに、学問の便益になるものとして、筆跡の上達を挙げている。

三つめ及び四つめ、兼好の漢籍に対する特別な思いを表す章段として、第十三段には、

ひとり、燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、

こよなう慰むわざなる。

文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことは、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしへののは、あはれなること多かり。  
(第十三段)

とあり、漢籍や日本の古典籍に対する慕わしさが横溢する。前段の第十二段において、兼好は、本当に心を許しあえるような「まめやかな心の友」が、現実にはいないことを嘆いていた。第十三段では、古の書物が心の友となり、心慰むという兼好の心境が吐露されている。

五つめ、第二百十段では、珍しい舶来の品物に対する否定的な見解が、『遠き物を宝とせず』とも、また、『得難き貨を貴まず』とも、文にも侍るとかや」という漢籍の言葉を引いて述べられる。「遠き物を宝とせず」は、『書経』旅獒、「得難き貨を貴まず」は、『老子』第三章が出典であると『徒然草寿命院抄（以下寿命院抄とする）<sup>5)</sup>』が指摘する。

六つめは、第二百十一段の「凡そ、『珍しき禽、あやしき獸、国に育はず』とこそ、文にも侍るなれ」であり、外来の珍しい動物を飼育する当時の世相に対して否定的な見方を示している。この出典は、『書経』旅獒であると『野槌』<sup>6)</sup>が指摘する。このように、舶来の珍しいものを好ましく思わない価値観は、調度品や庭の草木に見られた兼好の見方と通い合っている。

七つめは、第八十八段の「敏き時は、則ち功あり」とぞ、論語と云ふ文にも侍るなる」であり、一つの物事を成就させるために、

他を捨てて迅速に行動することの必要性を説いている。この出典は、『論語』卷第九・陽貨第十七からの引用であると『寿命院抄』<sup>7)</sup>が指摘する。

ここまで経書を意味する文の用例を取り上げてきたが、これと関連して「文」の状態を示す章段に注目したい。第八十二段では、頓阿や弘融僧都の言葉を紹介し、羅の表紙は、ほころびながらも大切に使用されることに価値のあることが述べられる。この点については、前節の調度品においても述べたところであり、兼好の文と調度品における価値観が、一脈通じていることが知られる。

八つめは、第八十二段の最後「先賢の作れる内外の文にも、章段の欠けたる事のみこそ侍れ」である。「内外の文」については、『寿命院抄』<sup>8)</sup>において、『摩訶止観』、『毛詩』、『大学』などが挙げられている。これは、兼好が重視した漢籍の学問と見事に一致する。

以上、第二十二段の文をめぐって、手紙の意味を示す五例と漢籍を示す八例について検討してきた。従来、ここでの「文」は、手紙を意味するものとしてしかとらえられてこなかった。しかし、漢籍としての文は、兼好にとつてそれ以上に比重の大きいものであると考えられる。第一段と第二百二十二段にもあるように、兼好は、人としての素養として漢籍の学問を挙げて重視しており、それは兼好の価値観の根幹をなすものの一つである。また、第二百十段や第二百十一段では、漢籍の言葉を直接引きながら、舶来の珍しい品物や動物をもてはやす当時の風潮を批判する。これは、舶来の珍しい調度品や庭木を好ましく思わない兼好の価値観と一致しており、不自然でわざとらしい振る舞いに対する批判とも通底する。漢籍としての

文は、『源氏物語』帚木巻を源泉とした伝統的で素直なものを良しとする美意識と大いに重なりあうものであることがわかる。以上のことから、第二十二段の「文の詞などぞ、昔の反古ともはいみじき」については、文の意味が手紙であることには変わりはないが、漢籍の意味も付け加えて理解したいところである。

## 五、言葉遣いをめぐって

次に、③「たゞ言ふ言葉も、口をしようこそなりもてゆくなれ」について考えたい。兼好は、古の時代と比べると残念なものになっていく日常の言葉として、特に宮中の言葉を例に挙げている。兼好が良しとする昔の言葉使いは、「車もたげよ」、「火か、げよ」主殿寮、人数だて、「御講の盧」である。これに対して、今様の言葉は、「もてあげよ」「かきあげよ」、「たちあかし、しろくせよ」、「かうろ」である。両者を比較すると、今様の言葉遣いは、「車」、「火」、「御講」といった対象を省略している。そこで、言葉遣いに関する古今の差異について述べた章段を三つ取り上げ、さらに深く考えていきたい。

一つめは、第十四段である。ここでは、和歌の言葉を取り上げて、「この比の歌」と「古き歌ども」を対比させている。昔の人の詠んだ歌は、「同じ詞・歌枕」であっても、今の時代の歌とは違って、「やすく、すなほにして、姿もきよげに、あはれも深く見ゆ」と高く評価している。さらに、この段の最後では、『梁塵秘抄』の郢曲の言葉まで取り上げ、「昔の人は、たゞ、いかに言ひ捨てたること

ぐさも、みな、いみじく聞こゆるにや」と評している。つまり、この段では、古い時代の言葉について、和歌の言葉から日常の言葉までを広く取り上げ、その良さを述べている。

二つめは、第一百十六段である。兼好は、寺院の名称や、そのほかの物への命名について、「昔の人」が、「少しも求めず、たゞ、ありのまゝに、やすく付けける」のに対して、「この比」では、「深く案じ、才覚をあらはさん」としていることを煩わしく感じている。この段の最後では、「何事も、珍しき事を求め、異説を好むは、浅才の人の必ずある事なりとぞ」と述べ、珍しさを追い求め、普通と違った考えを好む人を批判する。

三つめは、第六十段である。ここで兼好は、言葉の不適切な使い方について、四つの例を挙げている。一つめは、寺院や宮殿の門に額を懸ける時の言葉遣いであり、「打つ」ではなく、世尊寺流の藤原経尹は、「額懸くる」と仰っていると書いている。二つめ、棧敷の設置をめぐって、「平張打つ」とは言うけれども、「見物の棧敷打つ」は、良くないかもしれず、「棧敷構ふる」が良いと言っている。三つめ、「護摩焚く」ではなく、「修する」「護摩する」を良しとし、「護摩焚く」を良くない言い方であるとする。四つめは、「行法」の法の字の清濁をめぐり、清閑寺僧正の道我は、「濁りて言ふ」と仰っていると書いている。また、藤原経尹や道我の言葉を伝えることから、その道に通じた者の伝統的な意見を重視していることがわかる。この段の最後には、「常に言ふ事に、かゝる事のみ多し」とあり、日常の言葉遣いに対して、兼好が注意を深く向けていることが見て取れる。



この第六十段における兼好の言葉に対する意識をめぐって、山本真吾氏は、従来の学説として、兼好の尚古主義的な意識の表れであるとする見方と、それを懐疑視する見方を踏まえた上で、言語学の立場から古文獻の具体的な事例と『徒然草』の内部徴証より、兼好が、言葉遣いの正しさを古典の規範に求めたのではなく、当時の現実の言語運用の中に見出そうとし、それを専門家の意見により裏打ちしようとしたことを指摘する。一方、稲田利徳氏は、第六十段で紹介された言葉遣いが、伝統的に見て正当なものであったかどうかは、疑問であるとしつつ、兼好が藤原経尹や道我という専門の道の人間の意見を重んじていることを指摘する。

確かに、兼好の正しいとする言葉遣いが、真に古来のものであるかどうかを判別することは容易ではない。しかし、確実に言えることは、兼好が、言葉遣いの規範をその道の専門家に求めていたことである。この意味で、兼好の言葉遣いに対する意識は、尚古的であるといえる。

以上、第二十二段の「たゞ言ふ言葉も、口をしようこそなりもてゆくなれ」を理解するために、他の三つの章段を検討してきた。兼好は、古の和歌や昔の命名態度にあるような、素直な言葉遣いを好んでいた。これに対して、珍しい文字を使ったり、学才をひけらかさうとする命名態度には否定的であった。これは、舶来の珍しい調度品や庭木、及び不自然でわざとらしい振る舞いに対する兼好の否定的な見解と通じ合う。また、日常の言葉遣いに関する疑問についても、道の専門家の意見を重んじており、伝統を重視する兼好の姿勢がうかがえる。このように、伝統的で素直なものを好む価値観は、

言葉遣いにも及んでいることがわかる。

## 六、まとめ

以上、『徒然草』における尚古思想について、第二十二段を中心に検討を試みた。特に、兼好の古い時代への慕わしさを象徴するものとして、調度品、文、言葉遣いを取り上げた。

調度品について、第十段では、調度品と庭の草木は、家居をなす重要な要素であり、そこには人柄が表れるとしていた。兼好は、古風で落ち着いた調度品や、自然な風合いの庭の草木を好んでいた。反対に、舶来の豪華で珍しい調度品や、不自然な庭木を嫌っており、同様の考えは、人の振る舞いにも及ぶ。そもそも、伝統に比重を置く価値観は、第二十二段の「かの木の道の匠」の典故とされる『源氏物語』帚木巻の雨夜の品定めを受け継いだものである。兼好は、『源氏物語』によって審美眼を養い、その価値観を家居をなす庭の草木や、人の振る舞いに対する美意識にも拡大していったことがわかる。

文をめぐっては、第二十二段の「文の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき」の意味を理解するために、『徒然草』における手紙を表す五例と、漢籍を示す八例を検討した。確かに、従来の通り、ここでの文は、手紙を意味していることに変わりはない。しかし、兼好は、漢籍の学問の大切さを繰り返し述べるとともに、外来の珍しいものを批判するにあたっても漢籍の言葉を直接引いていることを考慮すると、漢籍の言葉も含めて理解したいところである。

言葉遣いに關して、兼好は、第二十二段では宮中の言葉の乱れに心を痛め、第十四段では、昔の和歌の言葉だけでなく、『梁塵秘抄』を例に挙げ、昔の日常の言葉も高く評価している。また、第一百十六段では、珍しさを追求するような命名態度を批判し、第六十段では、日常の言葉遣いへの疑問に対して、二人の道の専門家の意見を判断の基準としている。これらのことから、兼好は、言葉遣いの古今の差異、中でも日常の言葉に敏感であったことがうかがえる。こうした言葉に対しても、珍しく、奇をてらった表現を好まない姿勢は、調度品や人の振る舞いと通じ合うものである。

以上のように、調度品、文の詞、言葉遣いの三者に共通することは、珍しさや、一風変わったものではなく、伝統的で素直なものを好む兼好の価値観である。この源泉として考えられるものは、『源氏物語』帚木巻の雨夜の品定めと、漢籍の言葉である。兼好は、『源氏物語』に基づき、真の名人による伝統的な調度品を志向した。その考えは、庭の草木も含めた家居や、人の振る舞いへと拡大する。一方、兼好は、珍しいものをもてはやす風潮を批判する際にも、漢籍の言葉を引きいている。第二十二段の調度品と文は、兼好の尚古思想の源泉であるといえるのではなからうか。

【注】

(1) 『徒然草』本文の引用は、西尾実・安良岡康作校注『新訂徒然草』岩波文庫、一九八五年一月による。ただし、適宜、表記を改めた箇所もある。また、傍線箇所等については、稿者によるものである。以下、本稿の「徒然草」の引用本文は、特記しない限り同書に依拠する。

い限り同書に依拠する。

(2) 加藤磐斎『徒然草抄』は、有吉保編『加藤磐斎古注集成3 長明方丈記抄・徒然草抄』新典社、一九八五年一月による。

(3) 阿部秋生ほか編『新編日本古典文学全集20源氏物語①』小学館、一九九四年三月。

(4) 右に同じ。

(5) 泰宗巴『徒然草寿命抄』は、川瀬一馬解説『徒然草寿命院抄』松雲堂書店、一九三一年六月による。

(6) 林羅山『徒然草野槌』は、室松岩雄『国文註釈全書・徒然草野槌ほか』国学院大学出版部、一九〇二年二月による。

(7) 注(5)に同じ。

(8) 注(5)に同じ。

(9) 山本真吾「兼好の言語規範意識の側面―『徒然草』第六十段(門に額かくる)を手懸かりとして―」『人文論叢 三重大学人文学部文化科学研究紀要』第一一号、一九九四年三月。

(10) 稲田利徳『古典名作リーディング4徒然草』貴重本刊行会、二〇〇一年七月。